

Bulletion of Kagoshima
Prefectural Archaeological Center

From JOMON NO MORI

No.9 CONTENTS

About dish of the ltaji ware excavated from the Maehara Site
Egami Megumi

Tateno (Hiyamizu) kilns excavated White Satsumafor the age of “stamped product”
Department to investigate the south of the Jomon

《Result of the outside document investigation》

Manufacturing Techniques and Variability: Incipient Jomon Pottery from the Sankakuyama
I Site, Kagoshima, Japan
Fumie Iizuka, Masami Izuho, Pamela Vandiver, and Koji Okubo

《Materials of Archaeological Research》

The collection such as ancient baked salt earthenware vesselsand some consideration
Makoto Uwatoko

《Document collection》

Assembly of earthen earrings of Kagoshima Prefecture excavated
Department to investigate the south of the Jomon

Annual of Kagoshima Prefectual Archaeological Center of the 27th year in Heisei

Kagoshima Prefectural Archaeological Center
December 2016

研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第9号

前原遺跡で出土した土師器の坏について
— 九州中部の出土状況をもとに —
江神 めぐみ

豎野（冷水）窯跡出土の白薩摩型打ち製品の年代観
南の縄文調査室

《外部資料調査の成果から》

鹿児島県中種子町三角山Ⅰ遺跡出土
縄文草創期土器の成形技術とその変異性の研究
飯塚文枝，出穂雅実，パメラ・バンディバー，大久保浩二

《資料紹介》

鹿児島県出土の古代の焼塩土器等に関する覚え書き
上床 真

《資料集成》

鹿児島県内の耳栓状土製品集成
南の縄文調査室

平成 27 年度 年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター
2016.12

研究紀要・年報

縄文の森から

第9号

二〇一六 鹿児島県立埋蔵文化財センター

『縄文の森から』 第9号 目 次

前原遺跡で出土した土師器の坏について

— 九州中部の出土状況をもとに —

江神 めぐみ 1

堅野（冷水）窯跡出土の白薩摩型打ち製品の年代観

南の縄文室調査 . . . 13

《外部資料調査の成果から》

鹿児島県中種子町三角山Ⅰ遺跡出土縄文草創期土器の成形技術とその変異性の研究

飯塚 文枝，出穂 雅実，パメラ・バンディバー，大久保 浩二
. . . . 31

《資料紹介》

鹿児島県出土の古代の焼塩土器等に関する覚え書き

上床 真 51

《資料集成》

鹿児島県内の耳栓状土製品集成

南の縄文調査室 . . . 61

平成27年度年報 65

豎野（冷水）窯跡出土の白薩摩型打ち製品の年代観

南の縄文調査室

Tateno (Hiyamizu) kilns excavated White Satsuma
for the age of “stamped product”

Department to investigate the south of the Jomon

要旨

豎野（冷水）窯跡から出土した高品質の白薩摩である型打ち製品について、製作技法の特徴をまとめ、同様な技法の窯跡出土品との比較や文献史料から、製作された年代観を試考した。その結果、17世紀後半を中心に18世紀初頭までに作られた高級薩摩焼であることが判明した。

キーワード 型打ち製品、山元窯跡、肥前磁器、土型、国焼之皿

1 はじめに

薩摩の藩窯である豎野（冷水）窯跡出土品に、型打ち成形で製作されたデザイン性に富む高品質の白薩摩の皿がある。（本稿では総称して型打ち製品と呼ぶ。）

筆者は、これらの製品が藩窯として主要な製品供給先である鹿児島（鶴丸）城本丸や二之丸、島津一門家及び島津家に関係する寺社等の発掘調査では出土していないことや、現在のところ江戸薩摩藩島津家屋敷跡第2遺跡の出土資料に同一のものが存在する（註1）ことから、型打ち製品の性格を江戸藩邸において將軍家や幕府の有力な家臣、諸大名との外交行事（婚礼や特別な催事等）に供された器と考え、重要な宴席等で使用することを目的に製作された最高級品の白薩摩として位置づけた。（調査課第一調査係（東・関）2014、関2014）

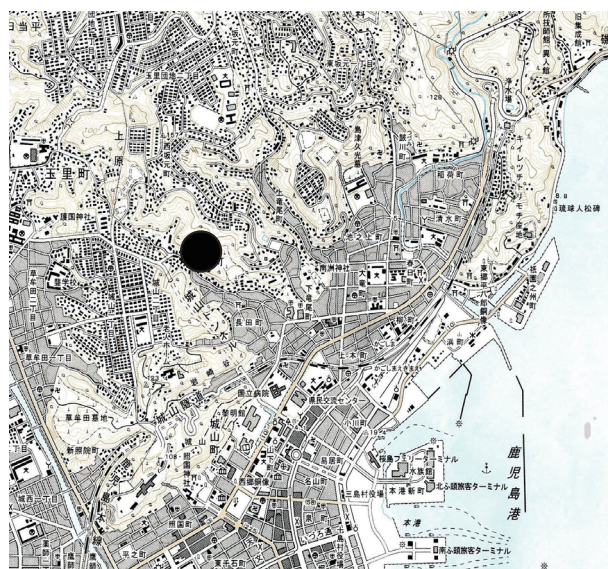
しかしながら、その年代観については、豎野（冷水）窯跡発掘調査報告書の中で出土品の年代考証が行われていないことや、江戸薩摩藩島津家屋敷跡第2遺跡の調査成果が未報告なことから、解明すべき重要な課題となっている。

そこで本稿では、製作技法に注目して型打ち製品の特徴をまとめた上で、同様な技法で製作する薩摩藩内外の窯跡出土品等との比較や文献史料から、製作された年代を試考してみたい。また、これまで未報告であった型打ち製品を追加して報告する。

2 豎野（冷水）窯跡の概要

豎野（冷水）窯跡は、鹿児島市冷水町市街地を取り囲むように形成されたシラス台地の小谷の末端に所在した江戸時代の薩摩焼古窯の一つである。（第1図）

窯跡は、昭和53（1978）年に社団法人鹿児島共済会南風病院女子寮建設に伴い発掘調査が行われ、それまで美術史上で語られることの多かった薩摩焼を、考古学上



第1図 豎野（冷水）窯跡位置図

の基礎資料として捉える契機となった遺跡である。

豎野系窯場は、一般的に「白薩摩」と呼ばれる白色陶胎の陶器を中心に、藩主やその一族などの上級武士層が使用する茶道具や日用品、中央権力者への献上・贈答品等を製作した窯場であるとされている。

この窯跡は、島津義弘時代の豎野系窯場である宇都窯、御里窯（ともに姶良市）を経て、義弘の跡を継いだ藩主・島津家久が鹿児島（鶴丸）城（鹿児島市）に移城した際、これに合わせて元和6（1620）年に開窯したとされる。（田澤金吾・小山富士夫1941）

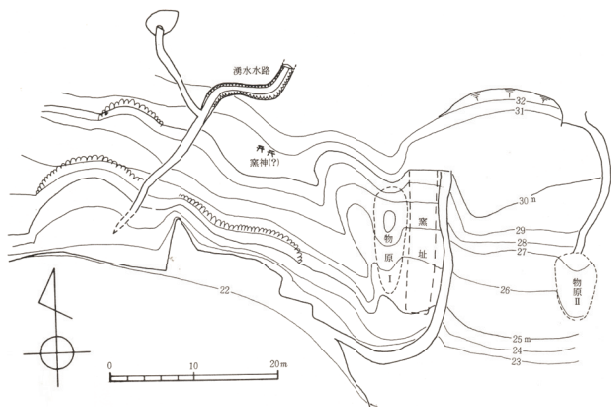
昭和53（1978）年に発掘調査が行われ、窯跡1基と物原2か所が検出された。窯体は平面全長14.48mを測る連房式登窯で、胴木間と7室の焼成室からなる。窯体は南向きの斜面に築かれており、標高は胴木間で約25m、窯尻で約30mを測り、物原からは大量の陶器片や窯道具が出土した（第2・3図、写真1～3）。

3 型打ち製品の特徴（第4～9図1～30、表1、図版1～4）

型打ち製品の主要な特徴は、意匠性に富むデザイン・形状と丁寧な作り、上質な胎土が挙げられる。ここでは、型打ち製品の特徴をまとめると共に、『縄文の森から』第7号（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2014）に掲載したものに、新しく図化したものを追加して掲載する。

（1）器種

口径15 cm前後の五寸皿がほとんどを占めるが、15 cmを超えるものや、口径10 cm程度の小皿も若干見られる。碗・鉢等は確認していない。『縄文の森から』第7号（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2014）で報告した際、第



第2図 豎野（冷水）窯跡周辺図

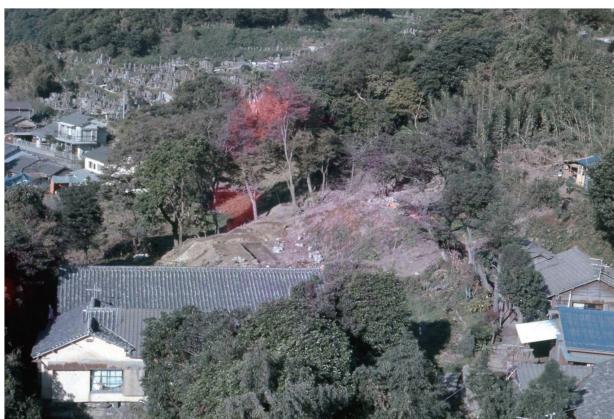


写真1 窯跡遠景

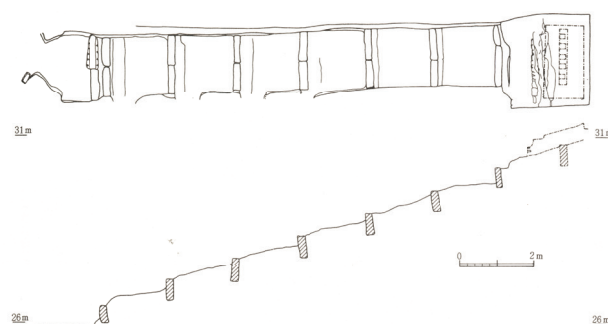


写真2 物原 I 断面

4図の5については鉢としたが、本稿では修正し深皿として分類した。

（2）形状

一般的な円形のほか、三角形、四角形、長方形、六角形、八角形、変形、輪花、稜花、桔梗縁、さらには鮑や月日貝、蛤、木の葉、蕪、瓜、茗荷を象ったもの等バリエーションがある。高台は器の形状に合わせ、円形（1～8）、楕円形（9～11）、三角形（12・13）、四角形（14）、長方形（15・16）、菱形（17）、花形（18）、八角形（19）等があり、その他変形高台（20）も見られる。小皿には高台を設けず、高さ1 cm弱で円柱状の足を3か所貼り付けるものもある（22～30）。また、皿に足が4か所貼り



第3図 豎野（冷水）窯跡 実測図



写真3 窯跡全景

付けられた資料も見られる (21)。

(3) 文様

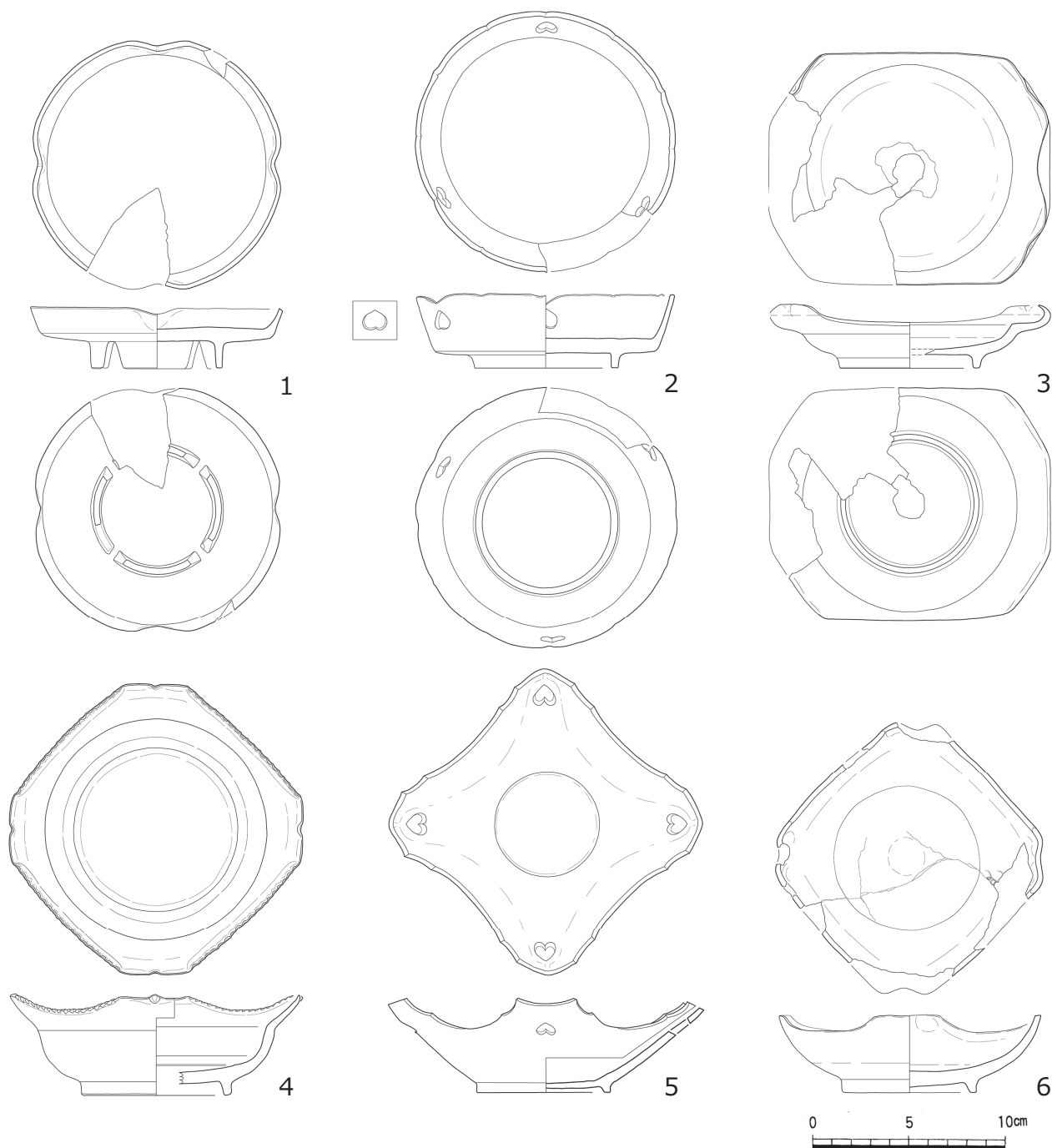
繊細な陽刻の唐草文様を施したもの (8・9・13・16・17) や、前述した貝や野菜の形を象り文様としたもの (20・23～30) がある。また、逆ハート型状の透かし彫りを施したもの (2・5・8) もみられる。しかしながら、色絵や染付により絵付けを施したものは見られない。

(4) 胎土

鉄微粒子を含まない、純白で緻密な白土である。堅野系窯場の白土について深港は、文政6 (1823) 年の『立

野並苗代川由来記高麗人渡来在附』(谷川編 1970) の星山家三代嘉人 (1649～1732) の頃、白土砂の産出地の記述に注目し、「諸所白土砂の儀も、潁娃、山川、指宿、加世田の内にて上中下位有之候付、上位土砂場の儀は御物土砂場に被差分、自儘の取方御禁制被仰付稠敷被差留候、(以下、略)」という記録から「白土砂」は品質により上中下に区別され、上位は御用土砂場となり、厳格に区分されていたことを指摘している (深港 2013, 2014)。

このような区別がいつ頃から行われていたのかは不明であるが、出土した型打ち製品の胎土は、純白上質であ



第4図 堅野 (冷水) 窯跡出土型打ち製品 実測図1

り、上級の白土が使用されていたことは間違いない。

(5) 製作技法

型打ち製品は、土型を用いて製作する。豎野（冷水）窯跡からは明確な土型は出土していないが、獣脚などの型押し用の土型等は出土していることから、型打ち製品の製作にも土型が使用されていたと推測される。

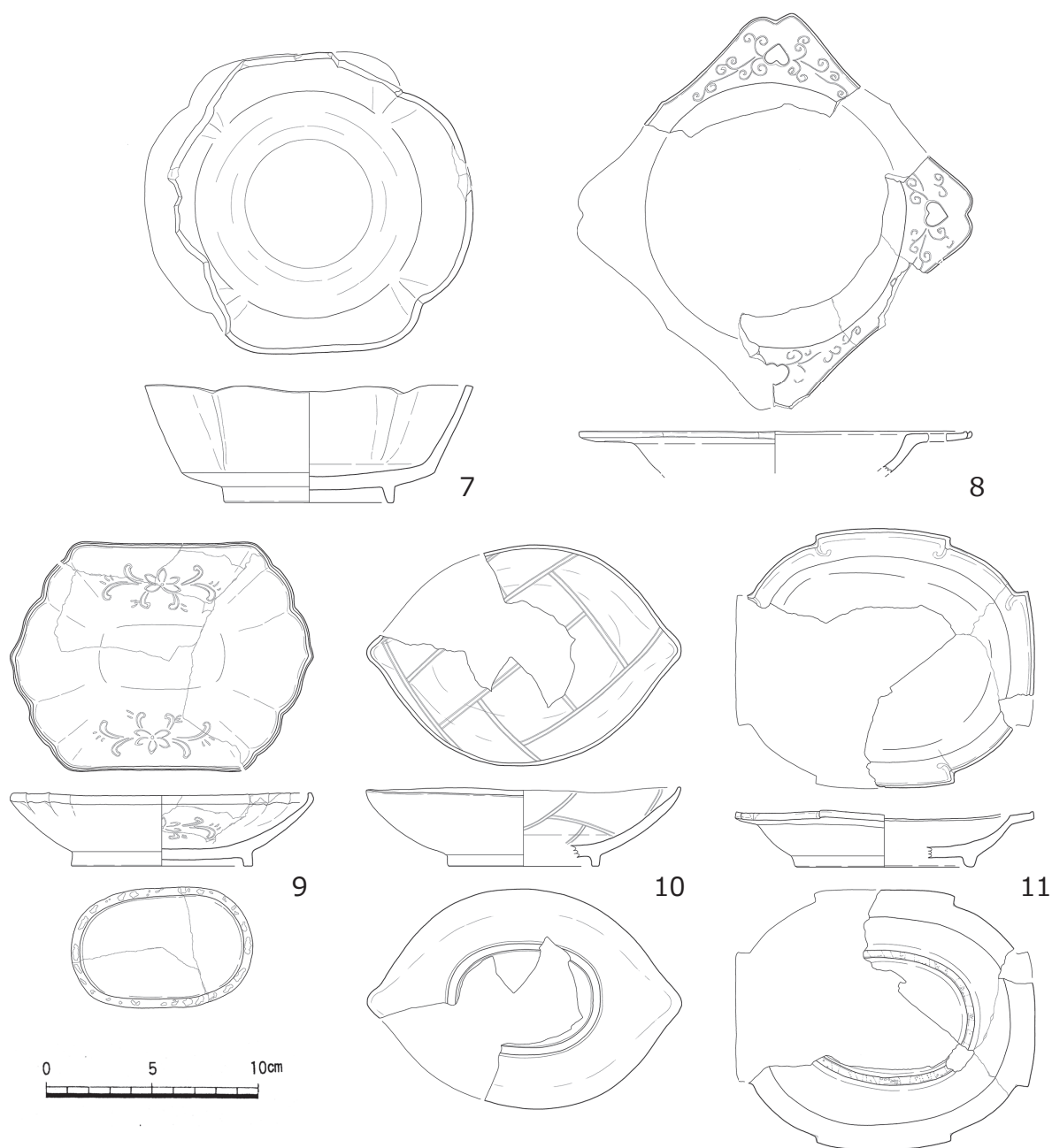
本稿の冒頭、型打ち成形により製作された製品を型打ち製品としたが、詳細に製作方法を見ると型打ち成形のほか糸切細工成形、時には両者を組み合わせて製作されていることが分かった。型打ち成形はロクロで円盤状に伸ばした素地を生乾きのうちに型にかぶせて叩いて変形させ、輪花や四角形などの皿や鉢等を作る技法である。主に丸形の器の成型に用いられ、高台はロクロで削り出

すため円形となる。糸切細工成形は板状にのぼした粘土を型にかぶせ、糸で形を切り出し変形の皿などを作る技法である。高台も器の形状に合わせて変形となり、貼り付け高台や足を付ける。

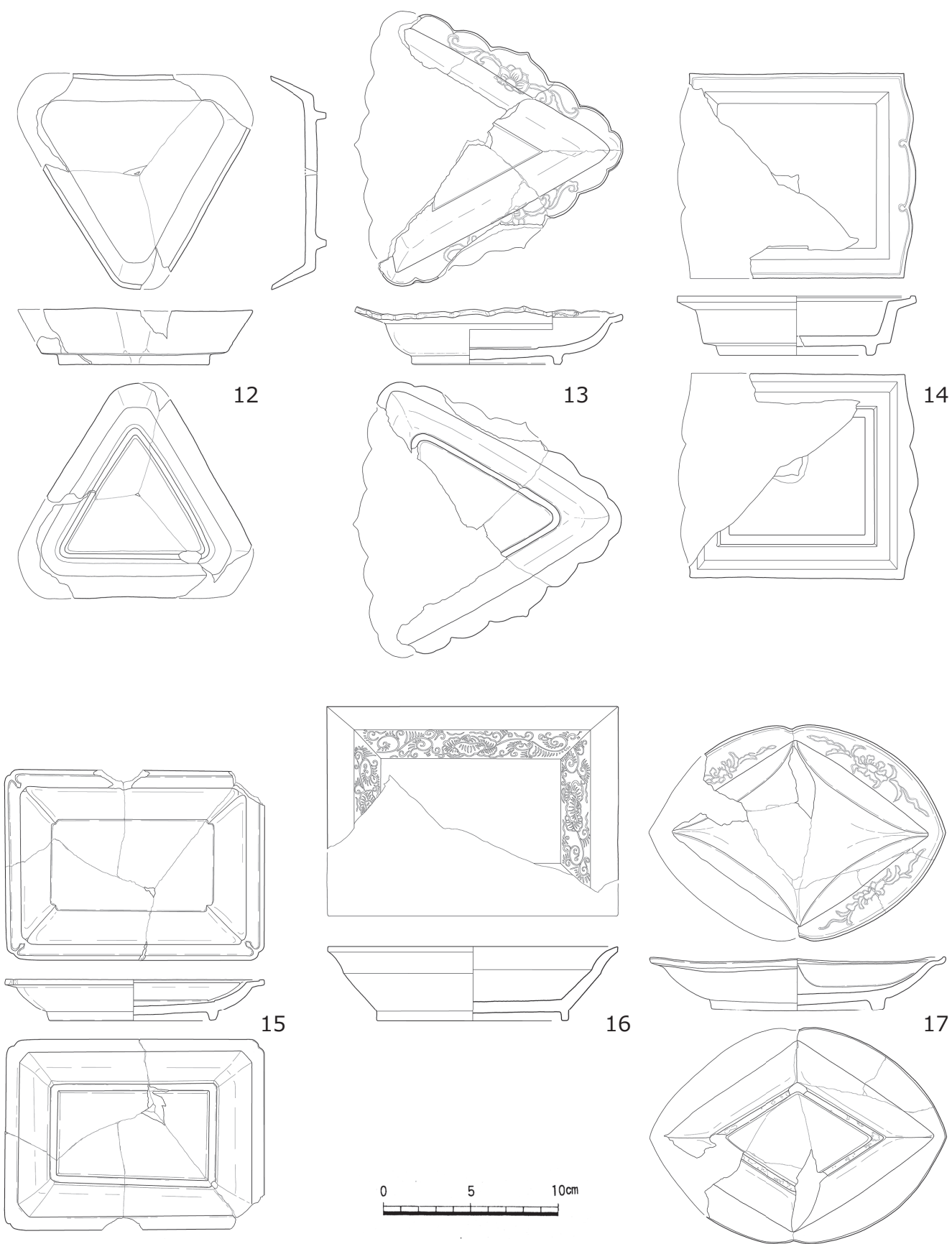
これらの成形技法は、ロクロ成形に比べ非常に手間のかかる技法である。意匠性の高いデザインの優れた器を、上質白土を使用して、丁寧に一つ一つ作り上げたものが型打ち製品なのである。

(6) 窯詰め

出土品には大量の匣鉢があり、その内底に型打ち製品の目跡が残る資料があることから、灰や不純物の付着、炎が直接触れないよう保護するため型打ち製品を匣鉢に入れて焼いたことがわかる。これらの匣鉢は、内底から



第5図 豎野（冷水）窯跡出土型打ち製品 実測図2



第6図 豎野(冷水)窯跡出土型打ち製品 実測図3

口縁部までの高さが5 cm程度で、窯道具としては精緻で良質な胎土で作られている。内底には直径5 mm程度の小さな砂目の痕跡が、長方形や楕円形、変形を作るように等間隔で密に残っている（図版4 31・32）。

型打ち製品は、直接匣鉢内に置かれたのではなく、これらの砂目の上に置かれた。ただし、内底に目跡が残る匣鉢は少量で、内底に粗い白土が塗られているものが大部分を占める。堅野（冷水）窯跡出土の匣鉢を含め、窯道具については今後も検討が必要である。

（7）型打ち製品ごとの特徴

以下、型打ち製品の実測図を掲載するとともに、資料ごとの説明を加えておきたい。

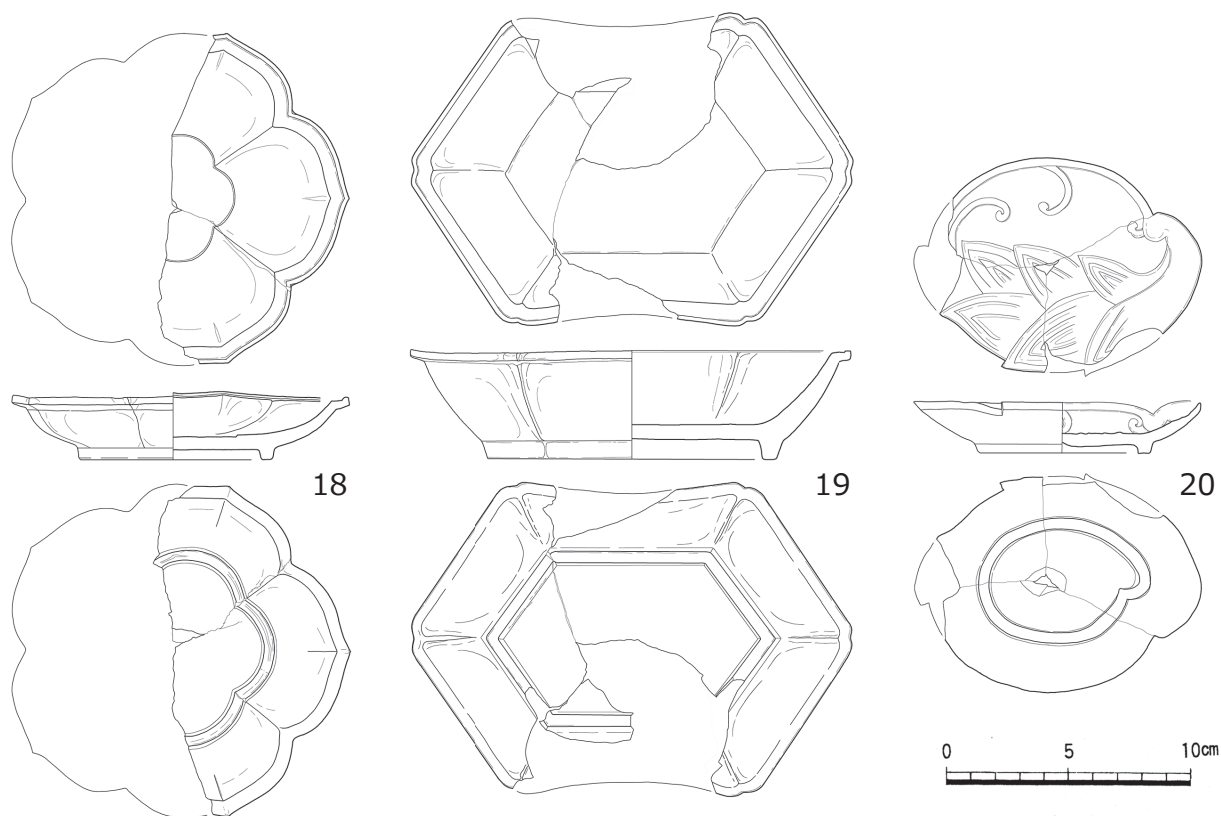
型打ち製品は、前述したように型打ち成形と糸切細工成形で製作されている。型打ち成形の高台は削り出しで作られ、糸切細工成形の高台は付け高台で変形高台をなすことから、本稿では、掲載する資料を大きく型打ち成形と糸切細工成形に分類し、さらに高台の形状により細分して報告する。（第4～9図）

1～8は型打ち成形で製作された資料である。3～6は、糸切細工成形も併用されていると考えられる。1～7は、高台が円形を呈する資料で、高台は削り出しにより作られ、器の形状はロクロ成形後、型打ち成形で製作される。1～3は口径が15 cm前後の五寸皿で、1は口縁部を輪花に作り、高台は割高台をなす。2も口縁部は輪花で、側面に逆ハート型の透かし彫りを3か所施す。

3は円形の端部を対面に2か所内側に折り曲げて耳状のアクセントを作り、残りの2か所は糸切細工成形により平行に切り落として対比させた形状である。底部には焼成後、外側から穿たれた小孔が見られる。この小孔は、焼成不良の器が他で使用されることを恐れ、確実に破壊した行為によるものと考えられる。

4～7は深皿である。4～6は四方隅入形で、4は四辺に細かい刻み目を施す。5は四方の隅部分に逆ハート形の透かし彫りが入る。7は口縁部を輪花に作る。8は高台が円形を呈すると考えられる深皿である（第5図）。口縁端部が折縁をなし、体部円形に対し口唇部は方形に作る。折縁上面は型打ち成形により陽刻の唐草文と逆ハート形の透かし彫りを施し、四隅の頂点は内側へ入る。

9～30は糸切細工成形で製作された資料である。9～11は高台が楕円形を呈する変形皿で、貼り付け高台である。9は器の形状が六角形を呈するが、2辺は直線4辺が輪花をなす。内面には、陽刻の唐草文を施す。10は木の葉形の変形皿である。内面に葉脈状の文様が見られる。11は四方の折縁の端部に陽刻の縁取線がつく。他に装飾はなくシンプルなデザインである。12・13は高台・器の形状ともに正三角形を呈する意匠性の高い皿である。12は陽刻の文様を施さないシンプルなデザインである。底部には焼成後、外側から穿たれた小孔が見られる。13は折縁の端部を稜花に作り、上面に陽刻の縁取り線と唐草文を施す。



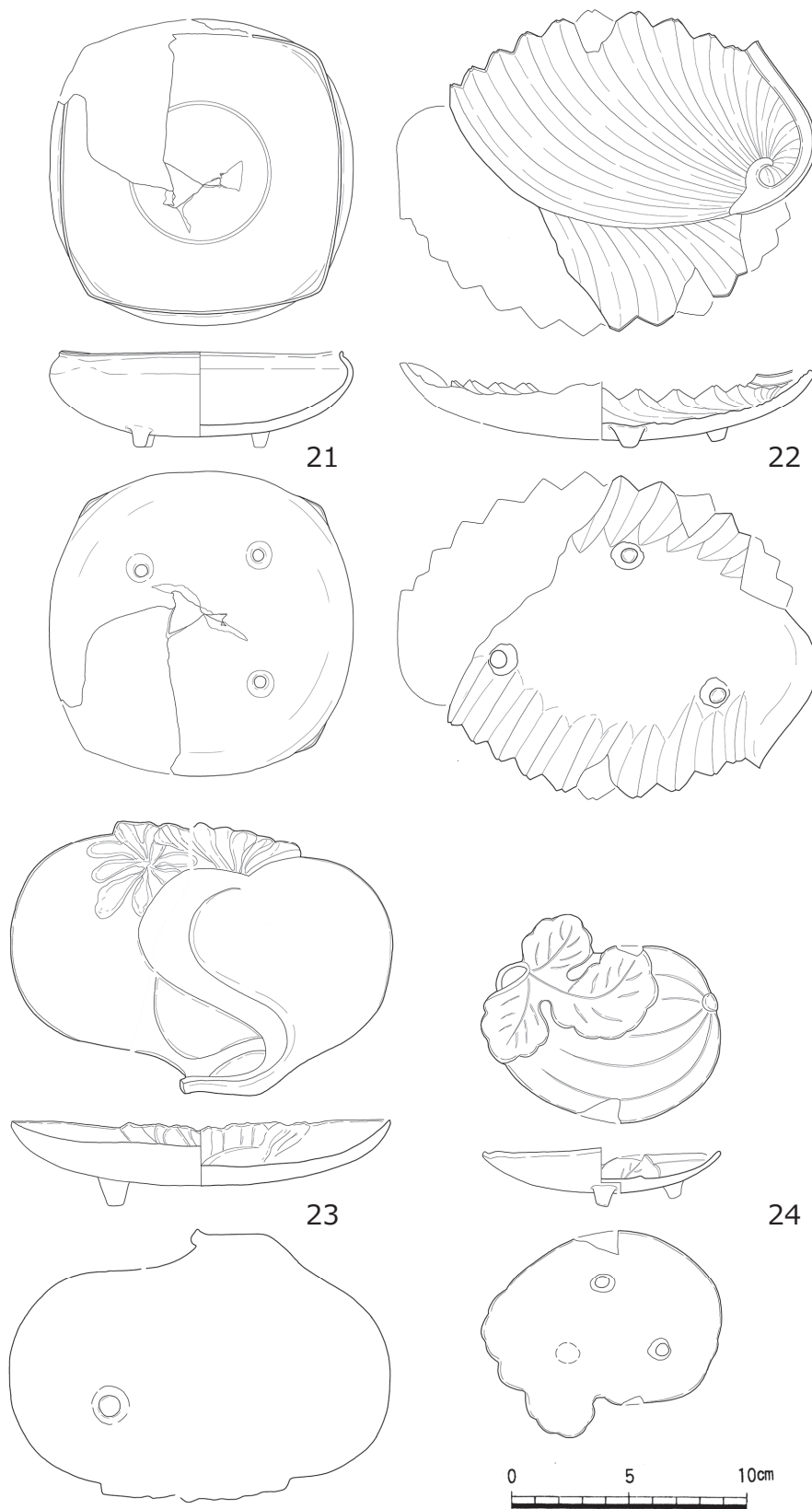
第7図 堅野（冷水）窯跡出土型打ち製品 実測図4

14 は高台が正方形，15・16 は長方形，17 は菱形の変形皿である。14 は短い折縁の端部に，陽刻の縁取り線がつき，一対面は波状に形取る。底部には焼成後，外側から穿たれた小孔が見られる。15 は長方形の形状を呈する薄手の皿で，短い折縁の端部は型打ちにより陽刻の縁取りがつき，四隅の頂点部は内側へ入る。16 は内面に段を有し，下段部に型打ちによる陽刻文を施す。角張ったシャープなつくりであるが，他の製品に比べて器壁は厚く重量感がある。『堅野（冷水）窯跡』(1978) 掲載の第 17 図 121 (p. 38) と同じタイプのものである。17 は菱形の形状を呈し，口縁を折縁に広げ花卉状に成形する。上面には型打ちによる陽刻の唐草文を施す。

18 は高台が花形を呈する皿で，器の形状は桔梗形である。19 は高台・器の形状ともに，六角形を呈する皿である。20 は変形高台の小皿で，体部は茗荷を象っている。薩摩藩島津家屋敷跡第 2 遺跡，E 区 20 号 b 遺構（大型方形土坑）内から極似資料が出土している。

21 ～ 30 は高台ではなく，底面に高さ 1 cm 程度の円錐状の小さい足がつく。21 は足が 4 か所つくと考えられる深皿で，口縁部は内傾する。底部には焼成後，外側から穿たれた小孔があり，22 ～ 30 は足が 3 か所つくと考えられる資料である。22 は 2 枚の羽を上下に組み合わせたデザインで，23 は燕を象った皿である。24 は瓜を象った小皿である。薩摩藩島津家屋敷跡第 2 遺跡，E 区 20 号 b 遺構（大型方形土坑）内から極似資料が出土している。

25 ～ 27 は月日貝を詳細に象った小皿で，28 は蛤形で蝶番部分もリアルに表現しており，29・30 は鮑形である。29 は 30 とその他の破片資料を基に図上復元を行った実測図である。外側には角状の突起も作られており，細部まで忠実に表現されている。突起の間とその反対側に 3



第8図 堅野（冷水）窯跡出土型打ち製品 実測図5

足が付く。

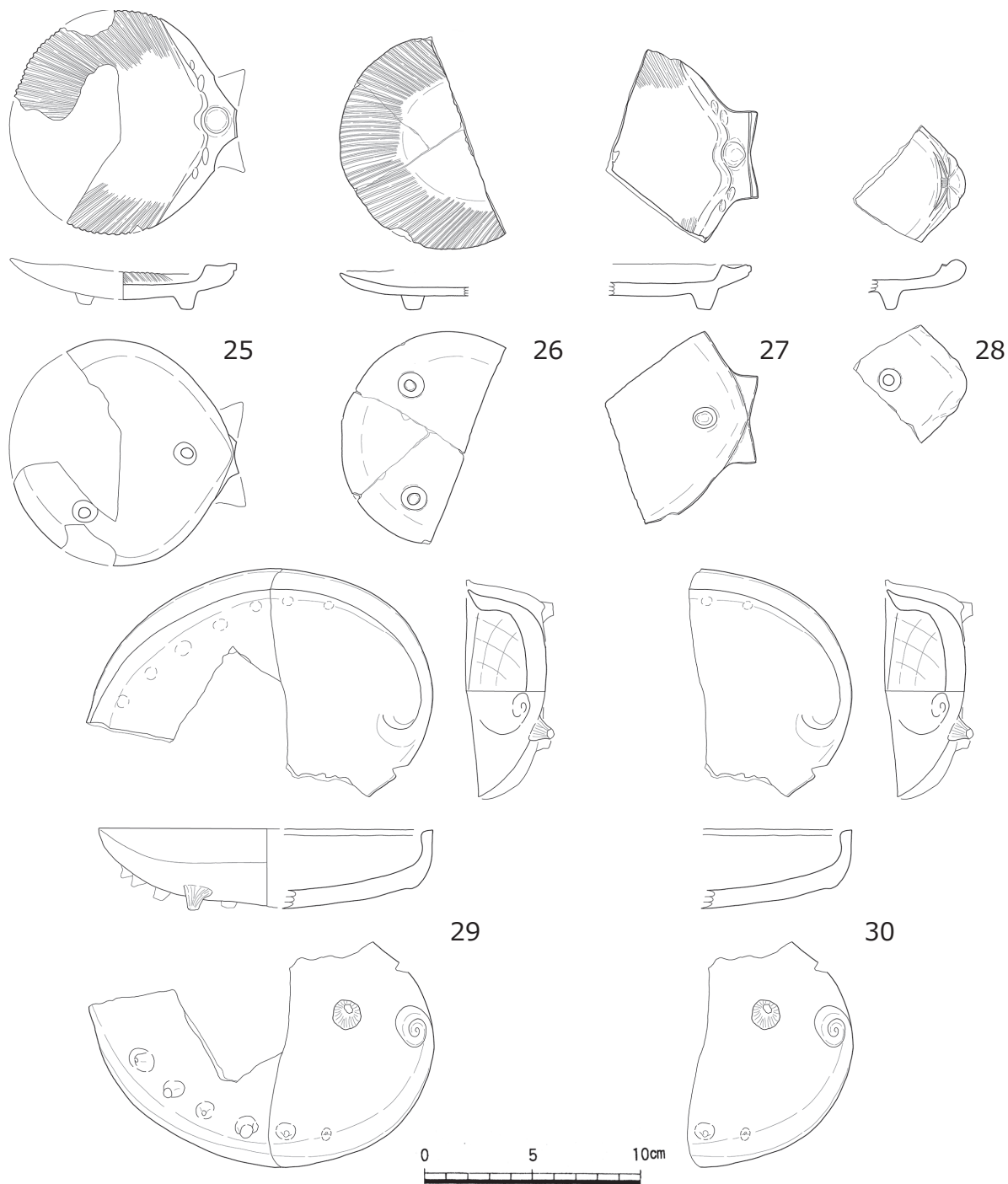
4 型打ち製品の年代観

以上のような特徴を持つ型打ち製品がいつ頃製作されたものか、ここでは、前章でまとめた型打ち製品の特徴の中で製作技法等に注目し、他の窯場の製品と比較検討することでその年代観を探ってみたい。また、文献史料も手掛かりとして検討してみたい。

(1) 藩内の窯場との比較

発掘調査が行われた藩内の窯で、堅野（冷水）窯と同様に匣鉢を使用する窯場との比較検討を試みたい。

堂平窯跡は、1620年代に文禄慶長の役の際朝鮮半島から連行された陶工らにより開かれた窯で、主に鉄釉をかけた甕・壺・播鉢・徳利等の大型日用陶器を生産し、17世紀第4四半期頃に閉窯したと考えられている。この窯では17世紀中頃から藩の政策の下、鹿児島（鶴丸）



第9図 堅野（冷水）窯跡出土型打ち製品 実測図6

表1 堅野(冷水)窯跡 型打ち製品観察表

掲載 番号	器種	出土区等	高台形状	胎土の 色調	釉薬	施釉部位	法量(cm)			備 考
							口径	底径	器高	
1	皿	不明	円形 割高台	白色	透明釉	畳付以外	13.2	6.7	3.2	輪花
2	皿	不明	花円形	やや黄色味が かった白色	透明釉	畳付以外	13.4	7.5	3.8	稜花 逆ハート形の透かし彫り
3	皿	物原Ⅱ 南西	円形	白色	透明釉	畳付以外	14.6	7.2	3.3	見込み中央に孔
4	深皿	不明	円形	白色	透明釉	畳付以外	15.1	7.8	5.2	
5	深皿	物原Ⅱ 南西	円形	白色	透明釉	畳付以外	16.3	7.0	4.9	逆ハート形の透かし彫り
6	深皿	不明	円形	白色	透明釉	畳付以外	13.4	6.9	4.0	
7	深皿	不明	円形	白色	透明釉	畳付以外	15.4	8.0	5.5	輪花 焼成不良
8	深皿	物原Ⅱ 北西	円形?	白色	透明釉	残存部全面	(18.4)	—	—	逆ハート形の透かし彫り 唐草文の陽刻
9	皿	不明	楕円形	白色	透明釉	畳付以外	(14.0)	(8.5)	3.4	内面に唐草文の陽刻
10	皿	物原Ⅱ	楕円形	白色	透明釉	畳付以外	14.9	7.2	3.8	木の葉形
11	皿	物原Ⅱ 南西 南西下	楕円形	白色	透明釉	畳付以外	(14.0)	(8.2)	(2.7)	
12	皿	不明	三角形	白色	透明釉	畳付以外	12.2	7.6	3.3	
13	皿	物原Ⅱ 南西下	三角形	灰褐色	蛇蛻釉状	畳付以外	15.1	9.4	3.3	
14	皿	不明	正方形	白色	透明釉	畳付以外	(13.7)	(8.8)	3.4	
15	皿	物原Ⅱ 南西下	長方形	白色	透明釉?	畳付以外	(14.7)	(9.4)	(2.4)	焼成不良
16	深皿	物原Ⅱ	長方形	白色	透明釉?	畳付以外	16.6	11.3	4.3	焼成不良
17	皿	物原Ⅱ	菱形	菱形	透明釉	畳付以外	(16.8)	(9.6)	(3.1)	陽刻の唐草文
18	皿	不明	花形	灰色	灰色がかった 透明釉	畳付以外施釉	(13.3)	(7.9)	2.8	
19	深皿	物原Ⅱ 南西 南西下	六角形	白色	透明釉	畳付以外	(13.3)	(7.9)	2.8	桔梗形
20	小皿	不明	変形	白色	透明釉?	畳付以外	11.8	7.0	2.1	見込み中央に孔 焼成不良
21	皿	物原Ⅱ	足4	白色	透明釉?	足部畳付以外	12.9	—	4.1	焼成不良
22	皿	不明	足3	白色	透明釉?	足部畳付以外	(17.8)	—	3.4	焼成不良
23	皿	—	足3	白色	透明釉?	外底面以外	(15.8)	—	2.8	蕪形 焼成不良
24	小皿	不明	足3	白色	透明釉	足部畳付以外	10.2	—	2.5	瓜形 焼成不良
25	小皿	不明	足3	やや黄色味が かった白色	透明釉?	足部畳付以外	(10.4)	—	2.2	月日貝形 焼成不良
26	小皿	不明	足3	やや黄色味が かった白色	透明釉?	足部畳付以外	—	—	—	月日貝形 焼成不良
27	小皿	物原Ⅱ 南西下	足3	やや黄色味が かった白色	透明釉?	足部畳付以外	—	—	(2.0)	月日貝形 焼成不良
23	小皿	物原Ⅱ 南西	足3	白色	透明釉?	足部畳付以外	—	—	(2.2)	はまぐり蝶番部 焼成不良
29	皿	—	足3	白色	透明釉?	足部畳付以外	—	—	3.9	鮑形
30	皿	—	足3	白色	透明釉?	足部畳付以外	—	—	3.9	鮑形

※ 法量は、断面をとった部分での数値を記載した。()書きのものは、復元の法量である。

城の瓦や藩窯から技術を導入した白薩摩の碗や皿が製作されている。堂平窯跡から出土した匣鉢の内底に白色の高台痕が残る資料があり、これらの匣鉢は堂平窯稼働期のⅡ期（17世紀後半）に分類される出土遺物とともに出土している（鹿埋セ編 2006，関 2009）。

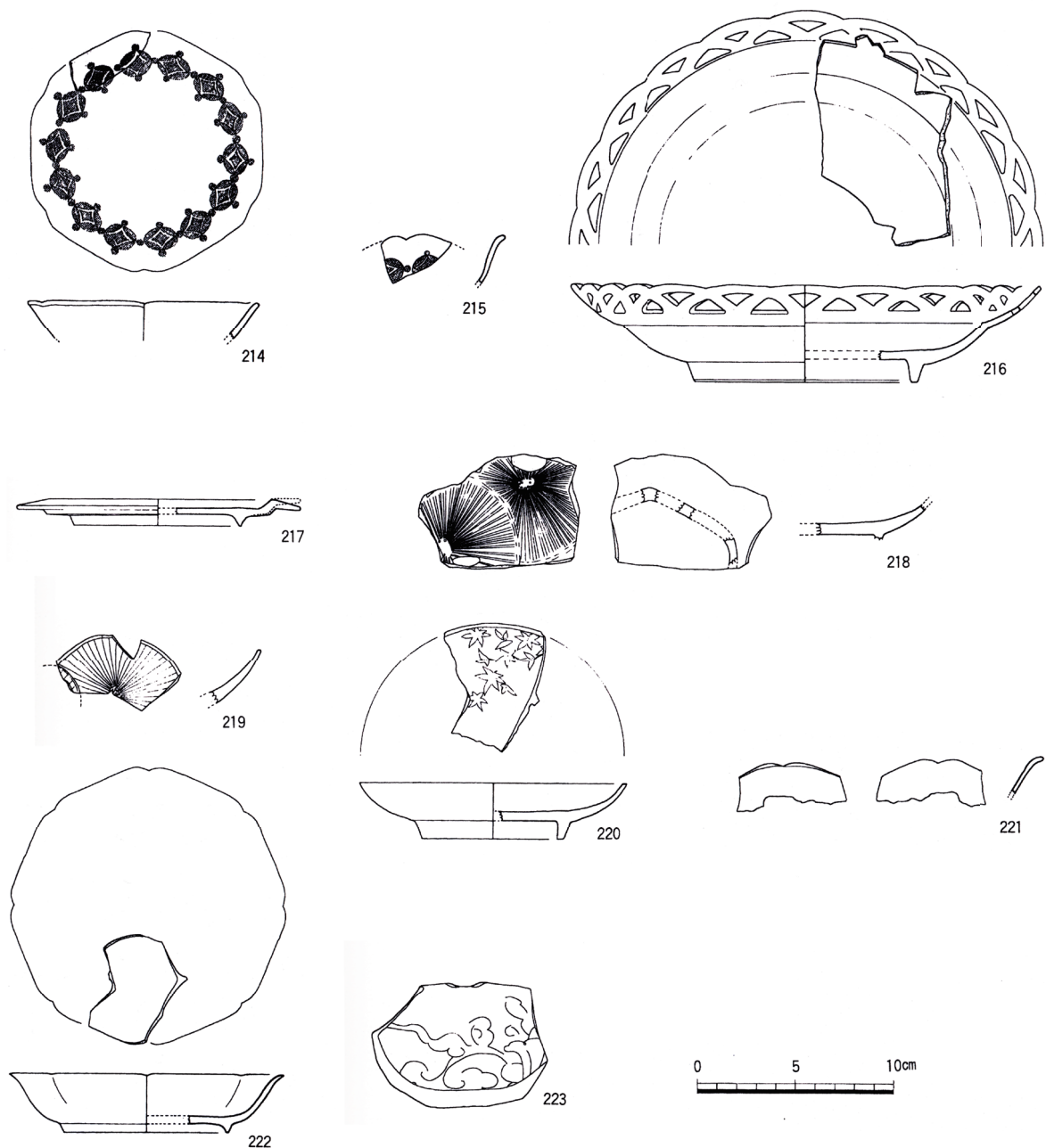
また、山元窯（始良市加治木町）からも糸巻形のトチンに混入して匣鉢や匣鉢蓋が出土している。山元窯は島津宗家に準ずる一門家である加治木島津家の御用窯で、1667年に開かれた。主に白色陶胎の陶器に飴釉の碗や皿が製作され、1680年代に閉窯したと考えられている（加治木町教委 1995）。

このように、薩摩焼では地方窯である堂平窯や山元窯でも17世紀後半に匣鉢を使用していたことが判明して

おり、藩窯である豎野（冷水）窯では、これらの地方窯に先んじて匣鉢を使用していた可能性が高いと考えられる。

豎野（冷水）窯，堂平窯，山元窯は，朝鮮系製陶技法の流れをくむ陶器窯であり基本的に匣鉢を使用しないため，匣鉢を使用する技法はいずれかの段階で普及した技法である。では，この匣鉢を使用する技法はどのように導入されたのであろうか。

ここで，注目しておきたい窯場が前述した山元窯である。この窯では陶器とともに磁器も焼かれている（第10図）。これらの磁器は，肥前磁器の技術で焼かれたもので，型打ち成形や糸切細工成形の出土品が報告されている。発掘調査報告書では218～220の3点を型打ち成



第10図 山元窯 染付・磁器 実測図（加治木町教育委員会 1995より）

形とて報告しているが、出土品を実見したところ、214は型打ち成形と透かし彫り、215～217・220～222は型打ち成形、218・219は糸切細工成形、223・224については全体形状が不明であるが、型打ちの技法であることを確認した。

山元窯において、17世紀第3四半期に磁器生産の技術が導入され、型打ち成形や糸切細工成形、透かし彫り等の製作技法により製品が焼かれていることは、藩窯である堅野（冷水）窯でも同時期または先んじてこれらの技法が導入されていたと考えられる。ましてや、藩窯の堅野系窯場に先行して地方窯が最先端技術を導入することは考え難い。藩窯で磁器生産が行われていたかどうかについては、今後の検討課題であるが、少なくとも白薩摩の素地に呉須で「寛文」という年号や文字、または簡素な文様を描いたものや磁器質の白薩摩も見られることから、肥前磁器を意識していたことは明かであろう。

以上のことから、堅野（冷水）窯跡における匣鉢使用や型打ち成形や糸切細工成形等の製作技法は、肥前磁器の窯場から、遅くとも17世紀後半には導入されていたと考えられる。

（2）肥前磁器の窯場との比較検討

では次に、堅野（冷水）窯跡に匣鉢使用や型打ち成形や糸切細工成形、透かし彫り等の製作技法が導入されたと考えられる17世紀第3四半期の肥前磁器の窯場の製品と比較を試みたい。

肥前では1640年代から50年代にかけて、革新的な技術変革が起こり、それまでの朝鮮系製陶技術に代わって中国系製陶技術が導入される。これにより色絵磁器の生産が始まり、変形皿等を製作する糸切細工成形も新たに導入されるようになる。この技法が一般化するのには1650年代以降で、高級品である色絵磁器の変形皿等が数多く生産される。第11図に示したように、肥前の色絵磁器を生産する多くの窯場から、型打ち製品や糸切細工成形による変形皿が出土している（村上2000他、註2）。変形皿の生産はこの後も見られるが、数多く生産されたのは17世紀後半の時期であったといえよう。

また第12図1・2は、酒井田柿右衛門家蔵の土型である。1は四方隅入深皿を象る土型である。この土型が使用された年代について、大橋は、写真4の伝世品の年代観を参考に17世末を指摘している（註3）。写真4の伝製品には四隅に瓢箪形の透かし彫りが、第12図1の土型には円形の透かし彫りが施されているが、透かし彫りの形状は異なるものの、器の全体的な形状については堅野（冷水）窯跡出土の製品（第4図5）に類似している。さらに1は方形皿の土型であるが、繊細な流水文が陰刻されている。堅野（冷水）窯跡出土品に類似した形状のものは見られないが、陽刻の繊細な唐草文が施された製品はあり（第5図8・9、第6図13・16・17）、土型に

陰刻で繊細な文様を施す特徴については類似する。大橋は、2の土型の年代について、土型に刻まれている陶工銘の情報から1691～1714年までの土型としている（註4）。

つまり、堅野（冷水）窯に肥前磁器の窯場から最新の製作技術が導入されたとされる17世紀後半期は、高級品である色絵磁器の隆盛時期とも重なる。

これらのことから堅野（冷水）窯において、色絵磁器の変形皿の形状を意識して型打ち製品を製作したと考えられるのではないだろうか。

（3）文献史料との比較検討

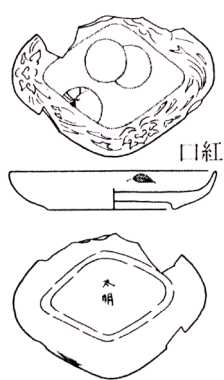
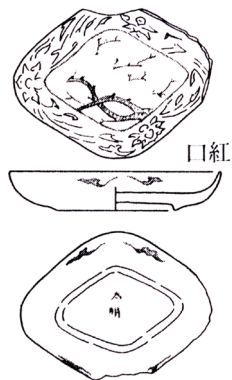
深港は『旧記雑録』の記録から、薩摩藩は慶安3（1659）年から貞享2（1686）年にかけて、「国焼之皿」、あるいは「薩州新製之皿」を幕府献上しており、それは5から10年おきに6回確認できること（表2）、その際は50個や5箱等数量が多いことに注目し、献上品は厳しく品質が管理されていたことから、同一規格のものが求められ、それは高度な技術を要すること、そして薩摩における白土発見が安永年間と言われていることから白薩摩であったのではないかと指摘している（深港2014）。

筆者は、この「新製之皿」が、堅野（冷水）窯で製作された型打ち製品に該当する可能性が高いと考えたい。「新製」とは、まさしく肥前から導入された型打ち成形や糸切細工成形といった磁器生産の技術を陶器である白薩摩に応用した「新しい製作技法」と考えられる。また、肥前磁器窯においても、これらの技法は献上・贈答用の高級磁器に用いる技法であるため、堅野（冷水）窯においても最高級な白薩摩の型打ち製品を生産する際に導入したのであろう。

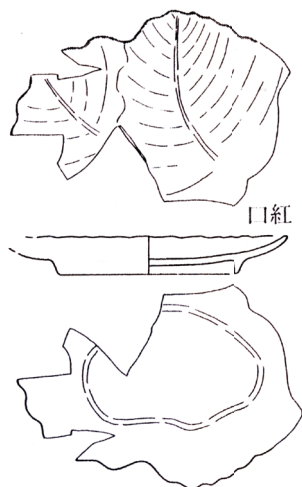
しかしながら、薩摩では上絵付けによる色絵技術をこの時期に確立することは困難であったため、上絵付けを施さない製品になったのであろう。染付についても、出土品の中に呉須で「寛文六年」（1666）の紀年銘が書かれた仏花瓶や染付の碗もあるが、文様の筆致は稚拙で、肥前の染付に到底及ぶような技術ではない。

表2 『旧記雑録』に見る幕府への献上品記録

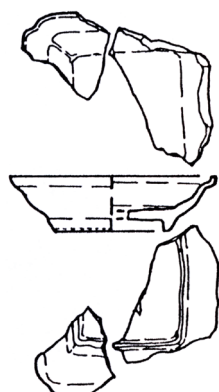
於其國焼之皿廿 (国元新製の皿20)	慶安3(1659)年 十一月廿日
於國焼之皿五十并 (国許で焼いた皿50)	万治3(1660)年 二月三日
於領國新製御皿五箱并 (領国で新製の皿5箱)	寛文11(1672)年 十月七日
新製之御皿二箱 (新製の皿2箱)	延宝4(1676)年 二月八日
薩州新製之皿五箱并 (薩州新製の皿5箱)	延宝4(1676)年 四月七日
御皿五箱并 (御皿5箱)	貞享3(1685)年 二月十八日



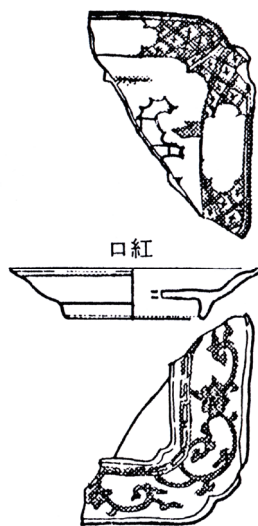
楠木谷 1 号窯跡
(1640 年代後半～1650 年代前半)



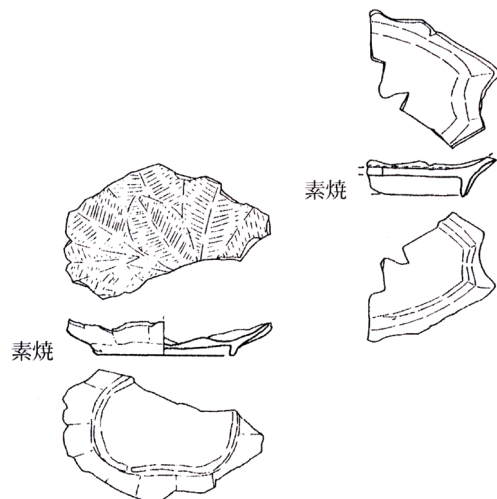
外尾山 4 号窯跡
(1640 年代後半～1650 年代前半)



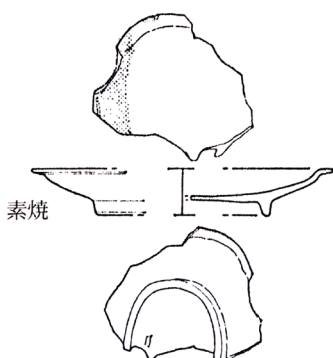
ダンバギリ窯跡
(1640 年代後半～1650 年代前半)



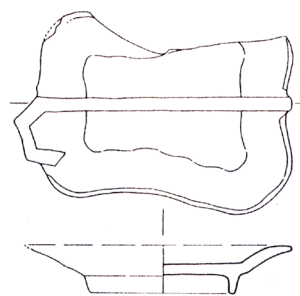
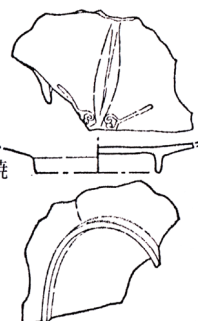
長吉谷窯跡
(1640 年代末～1650 年代中頃)



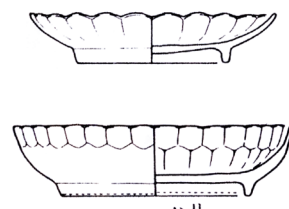
枳敷窯跡
(1650 年代前半～1650 年代中頃)



猿川窯跡
(1650 年代中頃～1650 年代後半頃)



柿右衛門窯跡
(1660 年代～1680 年代)



南川原窯ノ辻窯跡
(1680 年代～1690 年代)

第 11 図 1640 年代～1690 年代の生産遺跡出土の色絵・素地

「九州陶磁の縮年」2000

p230～p232 より一筆

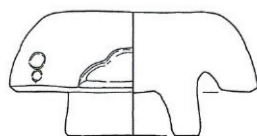


写真4 白磁四方隅入形深皿

口径 11.5 cm 1670～90年代 肥前・有田窯
柴田夫妻コレクション：佐賀県立九州陶磁文化館蔵



人名：－ 窯印：－



1

四方隅入形深皿土器
酒井田柿右衛門家蔵
『柿右衛門様式総合調査事業報告書』
1999



人名：田中刑部左衛門 窯印：－



2

方形皿 「田中刑部左衛門」
酒井田柿右衛門家蔵
『柿右衛門様式総合調査事業報告書』
1999

第12図 柿右衛門家蔵の土型1・2

堅野（冷水）窯跡から出土している同種・同型の型打ち製品は、手間暇がかかる製作技法でありながら発掘調査で大量に出土している。出土品を観察すると、これらの中には流用を避けるためであろう完成度の低い製品は一点一点その場で皿の中心を敲打し破砕している状況が看取されることから、型打ちによる法量の揃った高級な製品の一括生産がイメージできよう。

このような史料の内容は、前述した堅野（冷水）窯跡出土の型打ち製品の製作年代とも一致することから、「国焼之皿」や「薩州新製之皿」＝「堅野（冷水）窯で製作された型打ち製品」であると考えたい。つまり、型打ち製品は、『旧記雑録』に記載されている年代を考慮すると、少なくとも、1659年から1686年の間は製作されていたと考えられる。

また、型打ち製品は、江戸藩邸において幕府の有力な家臣や諸大名、または将軍家等との重要な宴席等で使用することを目的に製作された最高級品の白薩摩であると共に、献上・贈答品としての性格も持ち合わせていたと考えられる。しかしながら、現在のところ型打ち製品の出土は、江戸薩摩藩島津家屋敷跡第2遺跡以外では確認されていない、献上・贈答先に該当する遺跡での出土報告を期待したい。

5 おわりに

堅野（冷水）窯跡出土の型打ち製品について、その特徴や年代の位置付けを試考してみた。薩摩藩内の窯場を主導する藩窯・堅野系窯場で、最新の製陶技術は優先的に導入されたと推定でき、文献に記された記述も考慮す

るならば、型打ち製品が製作された年代は17世紀後半から下がっても18世紀初頭であると考えたい。

堅野系窯場の周辺は市街地化が著しく、今後規模の大きい発掘調査は望めない状況下で、昭和53年に調査された際の出土遺物の再検討は、薩摩焼の歴史を解明する上で極めて重要である。型打ち製品の特徴は幕末まで続く堅野系窯場の一時的な事象のひとつでしかない。今後、多くの解明すべき問題を秘めた遺跡であることを指摘しておきたい。（文責：関 明恵）

【注】

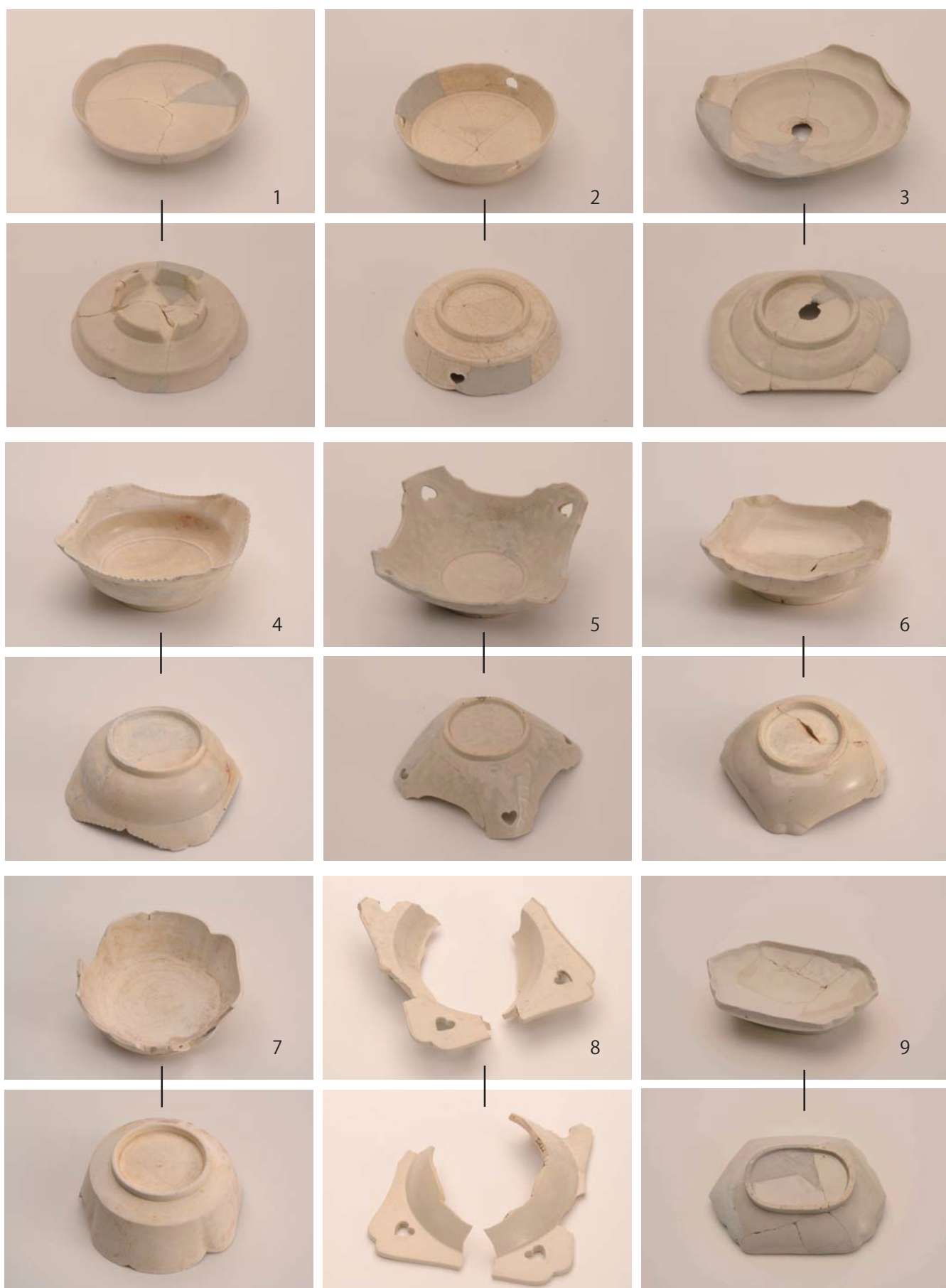
- 1 毎田は、この遺跡検出のB区2号遺構（大型土坑）の中から出土した三島手の碗と、E区20号b遺構（大型方形土坑）の中から出土したロクロ成形後型打ち成形の鉢について、堅野（冷水）窯跡出土遺物との類似性を指摘し、それらの製品が江戸の薩摩藩上屋敷に持ち込まれている可能性を指摘している。（毎田 2007）
- 2 村上は色絵製品の編年方法について、色絵製品や素地の出土している生産地の遺跡を中心に取り扱い、層位的な関係や共伴する染付製品などの年代観に基づいて変遷を考え、それに加えて年代的に基準となるものや、素地については消費遺跡の出土資料や伝世品をも活用している。
- 3 大橋は、南川原の柿右衛門家伝来土型と現川焼製品との類似性を検討する中で、柿右衛門様式の色絵など17世紀末に見られると指摘し、その例として、本稿掲載写真4（柴田コレクション：佐賀県立九州陶磁文化館蔵）を挙げている。
- 4 大橋は、土型に記されている柿右衛門窯陶工の田中左衛門銘について、土型のような口径15 cm程度のもの自体が有田

では一般的ではなく、このサイズ前後のものは18世紀後半に多いこと、また、佐賀県立九州陶磁文化館収蔵製品（柴田コレクションⅣ）の中に、比較的近い方形（1700～40年代）が見られることなどから、この土型は、田中新三郎が刑部左衛門に替り名（名前を変えること）した元禄4（1169）年から死去する正徳4（1714）年までのものとしている。

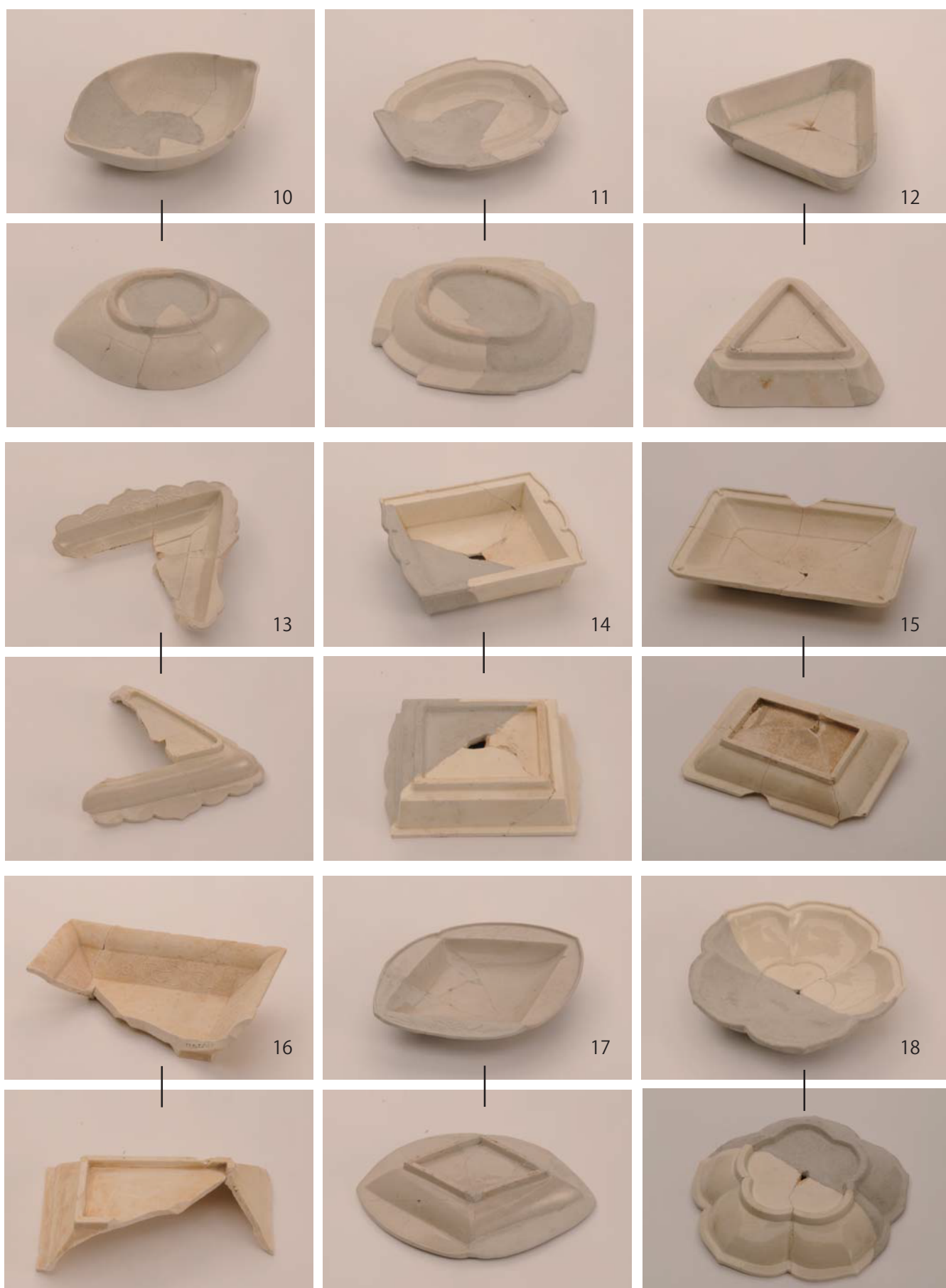
【参考文献】

- 大橋康二 1989『肥前陶磁』考古学ライブラリー 35 ニュー・サイエンス社
- 鹿児島県史料編さん所編 1976『鹿児島県史料 旧記雑録』
- 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（26）1983『鹿児島（鶴丸）城本丸跡』
- 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（55）1991『鹿児島（鶴丸）二之丸城跡（遺構編）』
- 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（60）1992『鹿児島（鶴丸）城二之丸跡（遺物編）』
- 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（106）206『堂平窯跡』
- 加治木町教育委員会発掘調査報告書 1 1995『山元古窯跡』
- 関明恵 2009「堂平窯跡の経年変改について」『南の縄文・地域文化論考』下巻
- 関明恵 2012「堅野（冷水）窯跡出土遺物の追加報告―物原Ⅰを中心に―」『縄文の森から』鹿児島県立埋蔵文化財センター研究紀要・年報 第5号

- 関明恵 2014「考古学の視点から見た堅野（冷水）窯跡」～冷水窯跡出土品の再整理の成果を中心に～『大名茶の時代』―薩摩と九州山口の茶陶 薩摩伝承館
- 田澤金吾・小山富士夫 1941『薩摩焼の研究』東洋陶磁研究所
- 谷川健一編 1970『日本庶民生活資料集成』第10巻 第一書房
- 調査課第一調査係（東和幸・関明恵）2014「収蔵遺物保存活用化事業―堅野（冷水）窯跡出土資料の再整理を中心に―」『縄文の森から』鹿児島県立埋蔵文化財センター研究紀要・年報 第7号
- 南風病院女子寮建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1978『堅野（冷水）窯址』社団法人鹿児島県共済会南風病院
- 毎田佳奈子 2006「薩摩藩江戸屋敷の“薩摩焼”（1）―土瓶・水柱・鉢子―」『東京考古』第25号
- 毎田佳奈子 2007「薩摩藩江戸屋敷の“薩摩焼”（2）―碗・鉢・皿・その他―」『東京考古』第26号
- 深港恭子 2013「千鳥印のある白薩摩と商売焼に関する一考察―『立野並苗代川高麗人焼物渡来在附由来記』を中心に―」『からから』27 鹿児島陶磁器研究会
- 深港恭子 2014「窯業地としての苗代川の形成と展開―薩摩焼生産の歴史―」『薩摩・朝鮮陶工村の四百年』岩波書店
- 村上伸之 2000「磁器の編年（色絵・色絵素地）」『九州陶磁の編年』九州近世当時学会
- 渡辺芳郎 2004a「模倣と技術交流―陶磁器におけるコミュニケーション―」『コミュニケーションのかたち―ことば・もののメディア』鹿児島大学



豎野（冷水）窯跡出土 型打ち製品 1



豎野（冷水）窯跡出土 型打ち製品 2



19



20



21



22



23



24



25



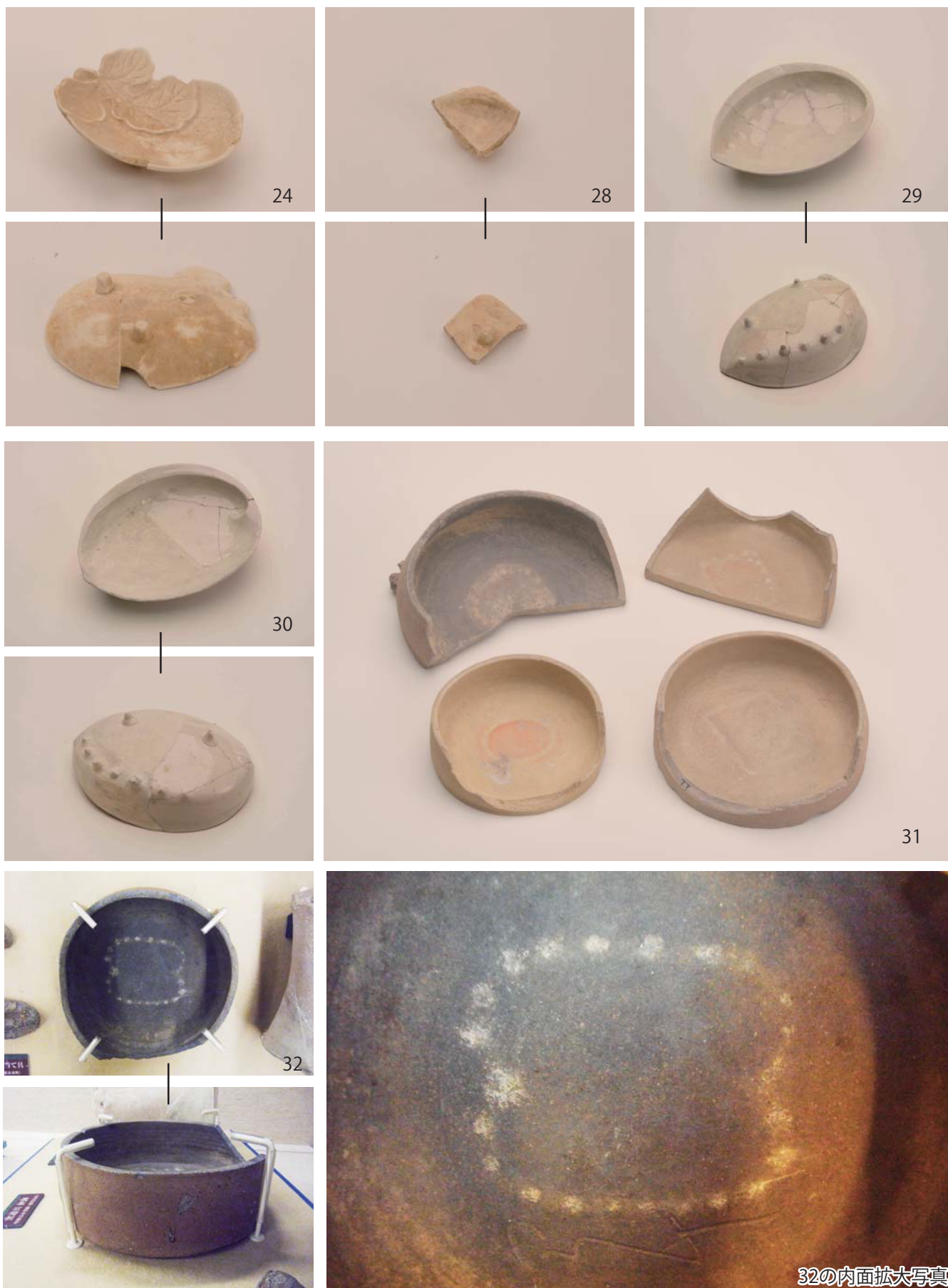
27



28



29



豎野（冷水）窯跡出土 型打ち製品 4

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要・年報 **縄文の森から** 第9号

発行年月 2016年12月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811

E-mail maibun@jomon-no-mori.jp

URL <http://www.jomon-no-mori.jp>

印刷 有限会社 国分新生社印刷

〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久627-1
